

昭和20年7月7日の未明だった。

「クワーン。」「あっ、B29だ。」私は思わず夜空を見上げた。今、ラジオで「甲府上空にB29あり。」との放送を聞いたばかりなのに。変だなと思った瞬間、西の空が急に明るくなった。「空襲。空襲。」と言う声が聞えた。焼夷弾だと思ふと同時に家へ飛び込み、手当たり次第荷物を土蔵へ運びこんだ。母は眠っている2歳の弟を抱いて、裏の防空壕へ寝かせた。それから何度も、土蔵と母屋を往復し荷物を運んだ。その内、奥に提げてあった御簾がメラメラと炎をあげた。「あゝ、もうだめだ。」母は床の間に置いてあった愛用のマンドリンを一旦持ったものの、今はこういう時代ではないのだと思い、又床の間にそっと置いて、大急ぎで防空壕へかけてきたのだと言う。お位牌と通帳等大事なものは、リュックサックに入れ防空壕へ運んだ。

空からはバラバラ焼夷弾が降ってくる。石堀まで燃えだした。(油脂が燃えたのを石堀まで燃えた様に見えた。)母は寝かせてあった弟を抱き上げすぐ背負ったが、ふだんから心臓の悪い母は走れない。私はお店から自転車をとってきて、荷掛けにくくりつけてある配達用のアルバジル錠の箱に弟を移し、一年生の上の弟を前にのせて走り出した。母は後から弟の入った箱をおさえて駆け出した。父は後に残って土蔵の戸を閉めていたので別行動になった。裏の門を出るとすぐ、足元に不発の焼夷弾が落ちていた。私は思わずその弾が憎らしくてけとばそうとしたが、もしここで火を噴かれたら、母や弟達はどうなるだろうと思ひぐっところえて、よけて走った。もう近所の家は火を噴いている。警防団の人が一人走っていくのが見えただけで誰にも会わない。

私達は夢中で逃げた。家から三町ばかり行ったところに田圃への近道がある。早く田圃へ出たかったのでその露地に入ると、先は火の海だった。あわてて、引返そうとしたが、道が狭くて自転車の向きがかえられない。私と母はどぶにはまりながらやっと向きをかえ、大通りに出た。その時にはもう左側の家の炎が道の真中をなめている。もう戻れない。私達は死にものぐるいで炎の下をくぐりぬけ、50メートル位走ったら、急に涼しい風が吹いてきた。防空頭巾をかぶっていたけれど、左の頬が熱かった。後で気がついたら、左の手の甲が真赤になっていた。

その町内が焼け残ったことがわかったのは後でのことで、その時は、まだ火が追ってくる様な気がして、無我夢中で田圃まで息もつかずに走った。刑務所の下の方角を見た時は、へとへとに疲れて畦道へ座りこんでしまった。家の方角を見るとまだ盛んに燃えている。田圃の中も所々、四畳半位の穴があき、黒い煙りをあげている。

「クワーン。バリバリバリバリ」とB29の音がする度に、田圃の中にひれ伏す。弟達は驚いて声も出ないのかおとなしくしている。母は二人の弟を抱いたまま田圃に座っていた。

どの位たったのか、その間眠っていたのか、起きていたのかわからない。

「お母ちゃん。お家へ帰ろうよ。」と言う弟の声で我にかえり立ち上った。怖い長い夜は明けていた。火もおさまりやと人心地がついた。誰の顔も手足も真黒だったので、小川の水で洗ったら、水はお湯の様に暖かくなっていた。

田圃から通りに出てみると、五町内の荒井さんの家の前だった。ここは幸い焼残っていた。荒井さんのおばさんが親切に、「今まで弟が住んでいた家が空家になっているから、しばらくお泊りになったら。」と言って下さったので、御親切に甘えることにした。

焼跡に帰ってみると、あたり一面が焼け野原に、家の土蔵だけが一軒ポツンと残っている。父も帰ってきていた。「あ、よかった。」ポツポツ帰ってくる近所の人達も、「国松さん。よかったですね。蔵が残って。」と口々に言ってくれる。

翌日、蔵を見上げると、紫色の煙が一条あがっている。蔵の前に行くと、中からゴウゴウという音が聞える。中は燃えているのだ。中には私の花嫁道具が入っている。「お父ちゃん。蔵あけて。中の物出そうよ。」と言うと父は「駄目だ。今あけたら一面火の海になる。せつかく助かった命じゃないか。」とあけてくれない。それから蔵のひさしに下げてあった玉ねぎや、立てかけてあった梯子等全部遠くへ離して、私達も道まで退避した。

お昼頃、煙りが一きわ大きくなったかと思ったら、急に瓦がガラガラと中へ落ち、炎が電信柱より高く上った。そのまま、しばらく燃えていたが、夕方土蔵の壁が東南の方へくずれ落ち、熱い土の山が出来た。通りを消防自動車を通ったが、火を見ても消そうともせずそのまま走り去った。「ああー。」ただ涙がこぼれた。母も泣いていた。

それから2週間、家では火を焚かなかった。土蔵の跡の土を掘ると、炎がガスの様に上るので、穴を掘っては、鍋や釜をかけ炊事した。手前の土が冷えるとだんだんと中へと穴を掘っていった。帰ってきている近所の人達にもこの高級な燃料を使ってもらった。

私達は毎日、借りていた家から焼跡へ通って後片付けをしたが、空襲のたびに夜中でも焼け跡の防空壕へ逃げてこなければならぬ不自由さがあった。それに焼かれるまでは怖くなかった空襲が急に怖くなり、焼け残った所にいるのが不安でたまらない。そこで焼跡にバラックを建てることにした。昔からの出入りの二番組の職人が、冷えた蔵の土をならしてくれ、左官の権さんが、息子と娘の婿のブリキ屋さんを連れてきてくれた。そして三人で石堀のところへバラックを建ててくれ、婿さんは、蔵の外側にはってあったトタン板で、米びつや、バケツ、洗い桶等日用品を作ってくれた。それに権さんは焼けるとすぐ見舞に来てくれ、丸焼で何にもないことを知り、まな板や、焼けた鉄火鉢の中へ漆喰を塗り、自分で削った木の台をつけて届けてくれた。私は優しい権さんの親切を忘れることが出来ない。

バラックが出来上るとすぐ焼跡で暮らすことになった。

7月20日の夜、又空襲。でももう怖くない。焼けるものがないし、明日はいよいよ銚子へ行くんだからと楽しみにし安心して寝ていた。銚子は母の実家で、前から早く、ふとんや衣類を取りにくるようにと、見舞いに来た従兄弟を通じて言付けがあったのに、切符が買えずのびのびになっていたが、今日やっと切符が手に入っ

たので行くつもりになっていたのに後片付けがながびき、明日行くことにしたのだ。

その晩の空襲は長かった。私は眠っていたのでわからなかったが、母は何だか胸さわぎがして一睡も出来なかったようだ。

翌日、午後の汽車で銚子へ向かった。父は留守番なので4人で行った。

「この列車は銚子まで行きます。」変な放送だと思ったら、昨夜の空襲で銚子がやられ前の列車は途中までしか行かなかったようだ。

松岸に着いた。ホームには真黒な顔をした焼け出された人達が群がっていた。車内の人達は、窓から体をのりだし、口々に身内の安否をきいている。母も窓から顔を出し、実家の様子を聞くと、誰か「美呂津さんではけがをした人がいるそうですよ。」と教えてくれた。母は、今朝櫛の歯が折れたからと、しきりに気をもんでいる。

銚子駅も被災し、まだ柱がくすぶっていた。街は一面に焼野原だが一部残っている所もある。利根川がすぐ前に見えた。母は自分の生まれた町だから、焼跡の道をどんどん歩いている。銚子の家の前まで来たがきれいに焼けて何にもない。近所の人はいもう焼跡を整理したり、避難先の住所を書いた立札を立てたりしているが、母の生家の焼跡には誰もいず、立札も立っていない。大根のおじさんがいたので聞いてみたら、「皆、済生会病院にいるそうですよ。」と教えてくれた。すぐ済生会病院にかけつけると伯父さんが驚ろいて出て来て、「どうしてわかったの。」と言う。伯父さんの話では、お祖父ちゃんや従兄弟達6人が避難する途中、大新の前で、直撃弾を受け、お祖父ちゃん達5人が死に、今、伯母さんが危篤だと言う。伯母さんを見舞い、お祖父ちゃん達の遺体を安置してある別荘へ行くことになった。

もう外は真暗、時々、缶詰会社の缶のはねる音が聞こえて来る。あちこちの焼跡には赤い炎や青い燐がまだ燃えている。まだくすぶっている煙の中を私達は野田別荘へ向った。

その晩、まだ停電の暗い別荘で、伯父さんから渡されたローソクの灯の元で、母は皆の遺体をアルコールで拭き清め一人で一晩中お通夜をした。私や弟は寝てしまったので、淋しかったでしょうと朝になって聞くと、母は「ちっともさびしくなんかないのよ。お父さん達と話をしていたからね。」と言った。私は親子とは大したものだと、つくづく親子の愛情の深さに感心した。

翌日、伯母さんも遺体で帰ってきたのでお葬式をした。

火葬場も焼け落ちたので、外へ石を積みロストルを渡してその上で遺体を焼いた。

私達はそばの山の上で焼けるのを待ったが、遺体は時々、するめのように手を上げたり、足を動かしたりする。私は生物は皆そうなんだなとこわごわ見ている。その間にも度々、空襲があった。私達はその度に木のかげにかくれたりした。火葬場のまわりの畑のやわらかい土には、不発弾が柵のようにたくさんさきさきっていた。

今でも目をつぶるとあの傷ましい思い出が昨日の様に、私の胸によみがえってくる。